

十勝岳の火山活動解説資料（令和8年4月）

札幌管区気象台
地域火山監視・警報センター

62-2 火口、振子沢噴気孔群及びその周辺では、噴煙・噴気が多く、特に 62-2 火口付近はごく微弱な発光現象が時々みられるなど、熱活動の活発な状態が続いています。また今期間は、火山性微動や火山性地震とそれに伴う傾斜変動、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量の増加が観測され、火山活動のわずかな高まりが示唆されています。今後の火山活動の推移には注意が必要です。

○活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図1-①～⑤、図2-①～③、図3～8、表1）

監視カメラによる観測では、62-2火口の噴煙は2021年頃から高い状態が続いており、今期間の噴煙の高さは火口縁上400m以下で経過しました。大正火口の噴煙の高さは100m未満、振子沢噴気孔群の噴煙の高さは稜線上100m以下で経過しました。振子沢噴気孔群の噴煙は2018年頃からやや高い状態が続いています。

今期間、62-2火口付近でのごく微弱な発光現象（火映を含む）を高感度の監視カメラにより複数回観測しました。この現象は、62-2火口付近での高温のガス噴出や硫黄の燃焼等によるものと考えられ、2020年6月以降時折観測されています。

5月11日（期間外）に国土交通省北海道開発局の協力により実施した上空からの観測では、振子沢噴気孔群で、昨年（2025年）8月12日）と比べて活発な噴気域の拡大及び高温化が認められました。

・火山ガスの状況（図2-④）

28日に実施した現地調査では、1日あたり1,200トンの火山ガス（二酸化硫黄）放出量を観測しました。前回の観測（3月18日、1日あたり300トン）と比べ多い状態でした。1日あたり1,000トン程度の火山ガスの放出量を観測したのは、2023年3月（1日あたり900トン）以来です。なお、北海道大学が30日に実施した現地調査でも同程度の火山ガスの放出量が観測されました。

・地震及び微動の発生状況（図1-⑥～⑨、図2-⑤～⑦、図9～11）

火山性地震は前期間と比べわずかに増加しましたが、少ない状態で経過しました。震源は主に62-2火口のごく浅い所、旧噴火口付近及びグラウンド火口付近の深さ0km～深さ1km付近に分布しました。62-2火口付近では20日朝から昼過ぎにかけて一時的に火山性地震がやや増加しました。

20日に規模の大きい火山性地震と62-2火口方向が下がる傾斜変動に伴う継続時間約11分間⁽¹⁾の振幅が小さい火山性微動を観測しました。

(1) 精査により継続時間を約3分間（速報値）から約11分間に変更しました。火山活動状況の評価は特段変わりません。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和8年5月分）は令和8年6月8日に発表する予定です。

・地殻変動の状況（図11～13）

20日に観測した火山性地震及び火山性微動に伴い、主に62-2火口の周辺の傾斜計で62-2火口方向が下がる傾斜変動を観測しました。2018年以降、62-2火口付近の火山性地震や火山性微動に伴う傾斜変動が時折観測されています。

GNSS連続観測では、2021年以降に山体浅部の収縮傾向を示す地殻変動が観測されていましたが、2022年以降次第に鈍化し、2024年秋以降は一部の基線で概ね停滞しています。

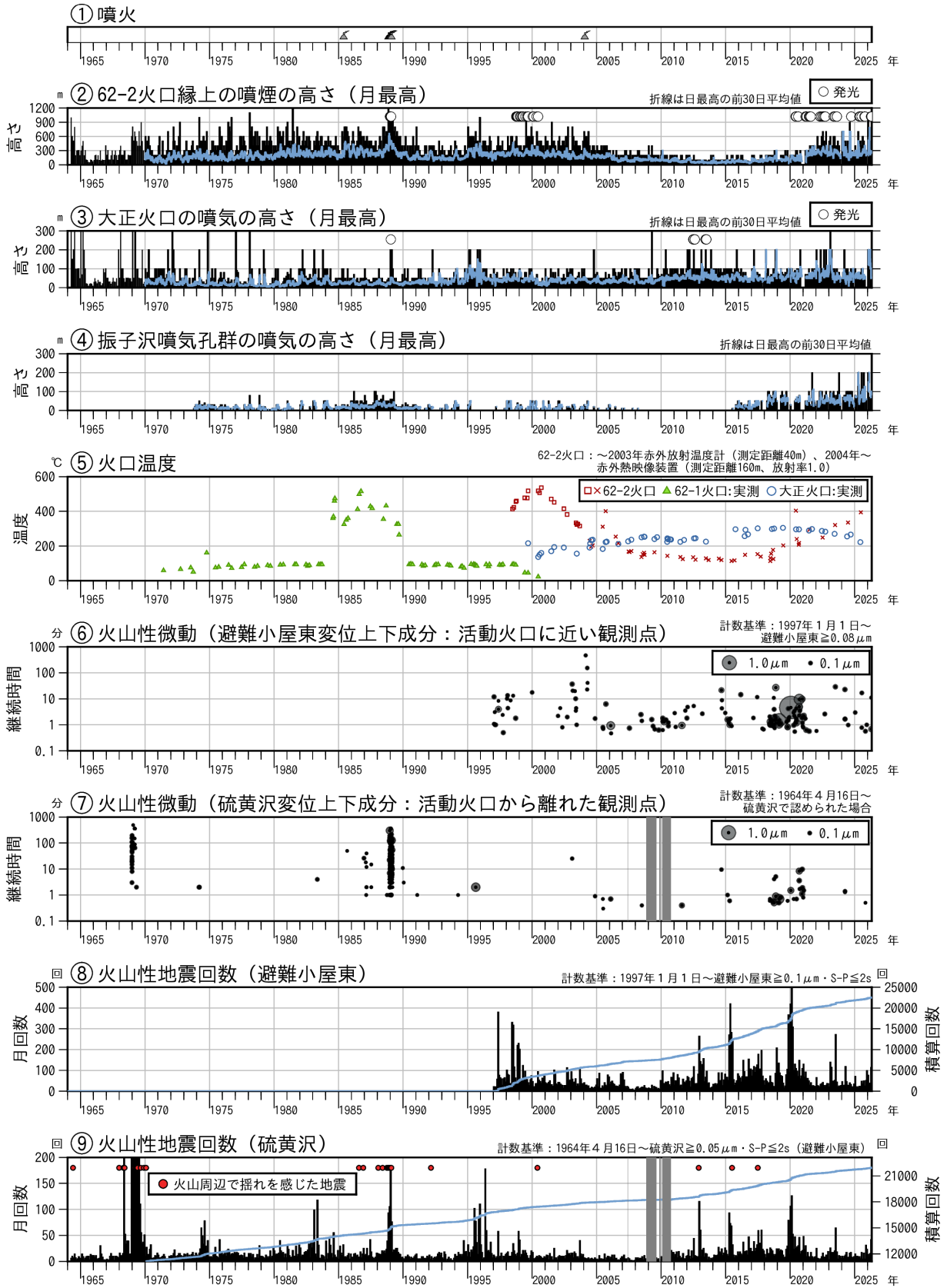


図1 十勝岳 火山活動経過図（1964年1月～2026年4月）

⑤の62-2火口及び大正火口の温度は、地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所及び国立研究開発法人産業技術総合研究所のデータを含みます。
 ⑦⑨の灰色部分は機器障害による欠測期間を示します。

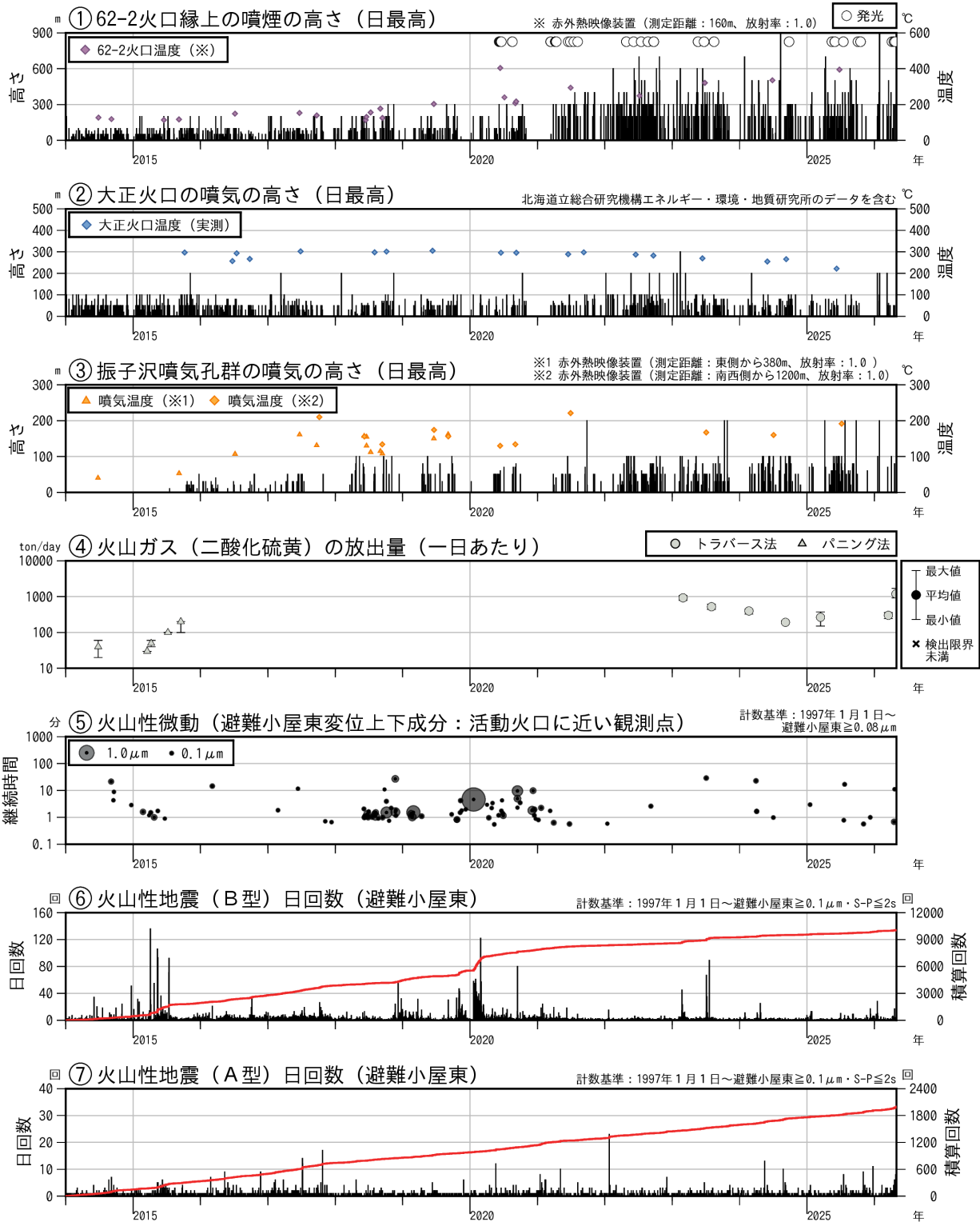


図2 十勝岳 火山活動経過図 (2014年1月~2026年4月)
 ⑥は主に62-2火口付近のごく浅い所 (図9参照) で発生したと推定されるB型地震の回数、
 ⑦は主にその周辺で発生したと推定されるA型地震の回数を示します。

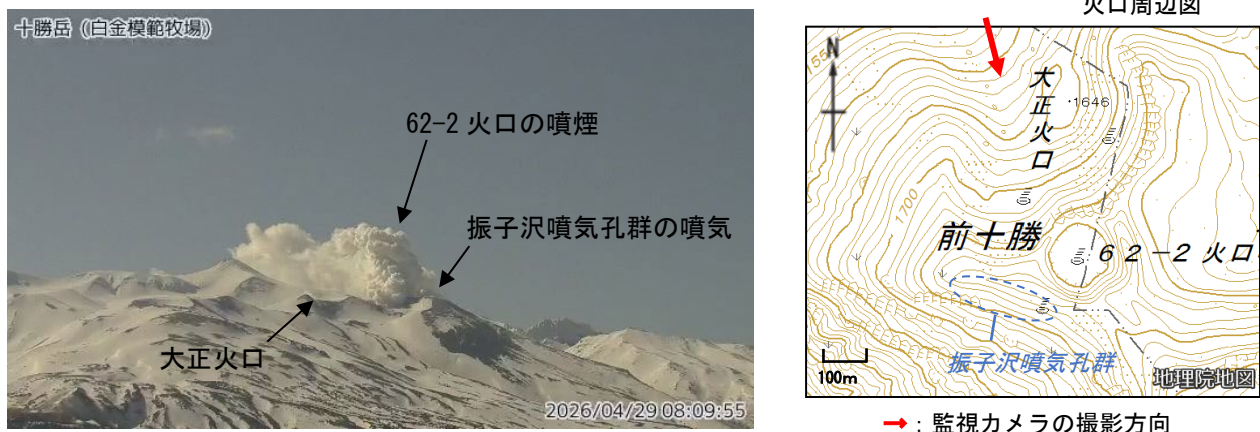


図3 十勝岳 北西側から見た火口周辺の状況（白金模範牧場監視カメラによる）及び火口周辺図

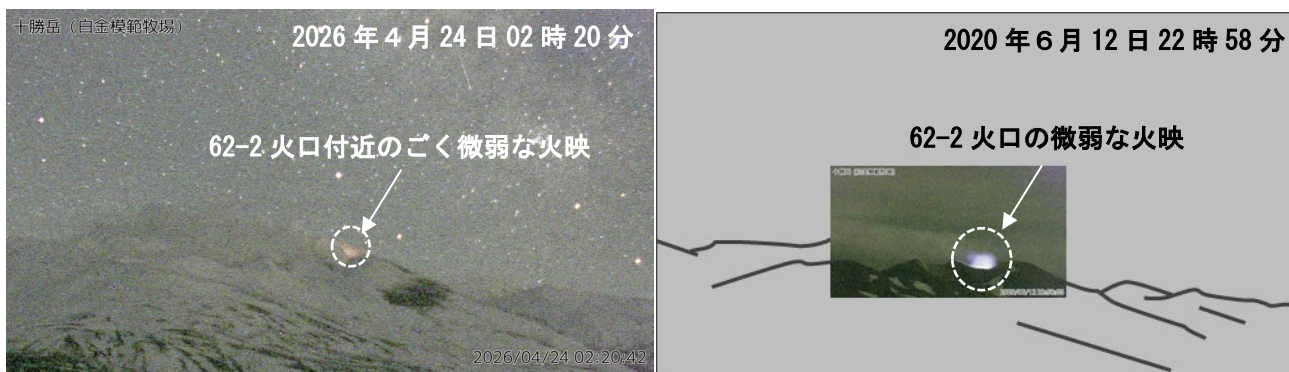


図4 十勝岳 62-2 火口付近で観測された発光現象（火映）（白金模範牧場監視カメラによる、撮影方向は図3と同様）

左：24日に観測されたごく微弱な火映

右：2020年6月12日に観測された微弱な火映（6月7日～19日の夜間、断続的に観測）

表1 十勝岳 2026年4月に観測された62-2火口付近の発光現象（山麓に設置された高感度の監視カメラによる）

※1：発光現象により火口上の雲や噴煙が明るく照らされた現象を観測した場合には、火映として表記している。

観測日	発光現象 ^{※1}	発光現象の強度、発生状況
6日夜	火映	ごく微弱、断続的
17日夜～18日未明	発光現象	ごく微弱、断続的
24日未明	火映	ごく微弱、ごく短時間

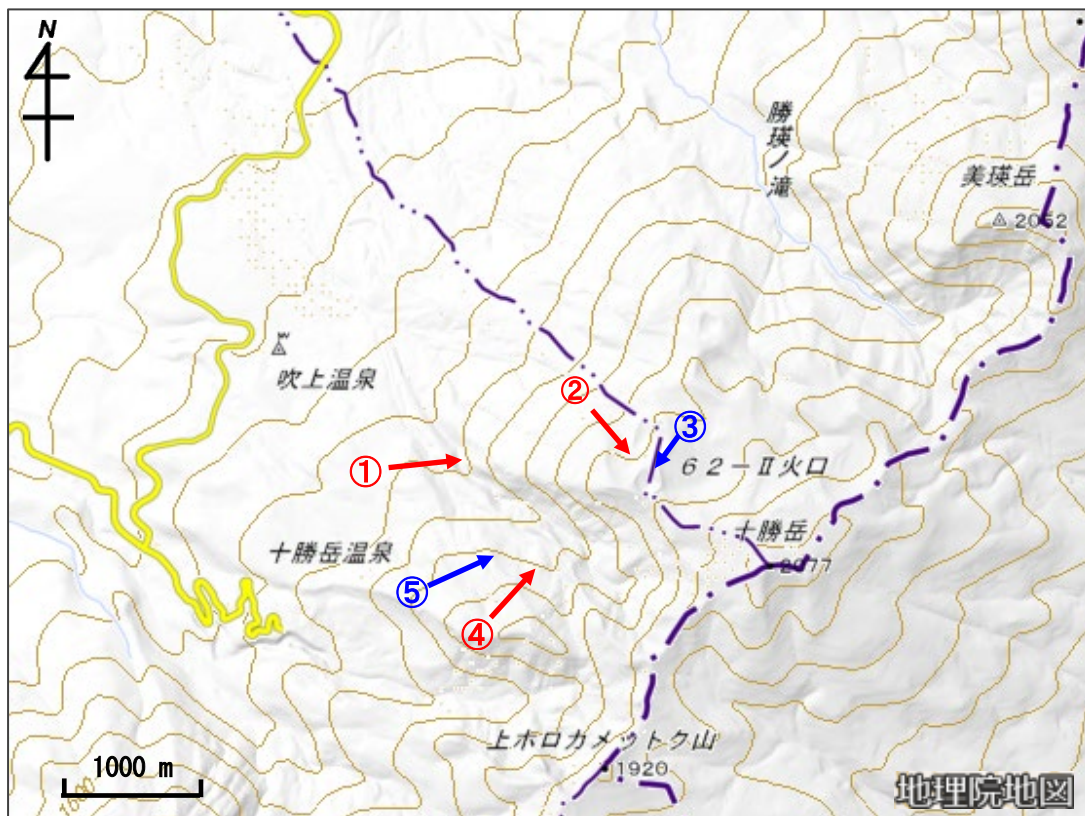


図5 十勝岳 写真及び赤外熱映像の撮影方向 (矢印)



図6 十勝岳 火口周辺の状況
西側上空 (図5の①) から撮影
・62-2 火口及び振子沢噴気孔群では、活発な噴気活動が認められました。

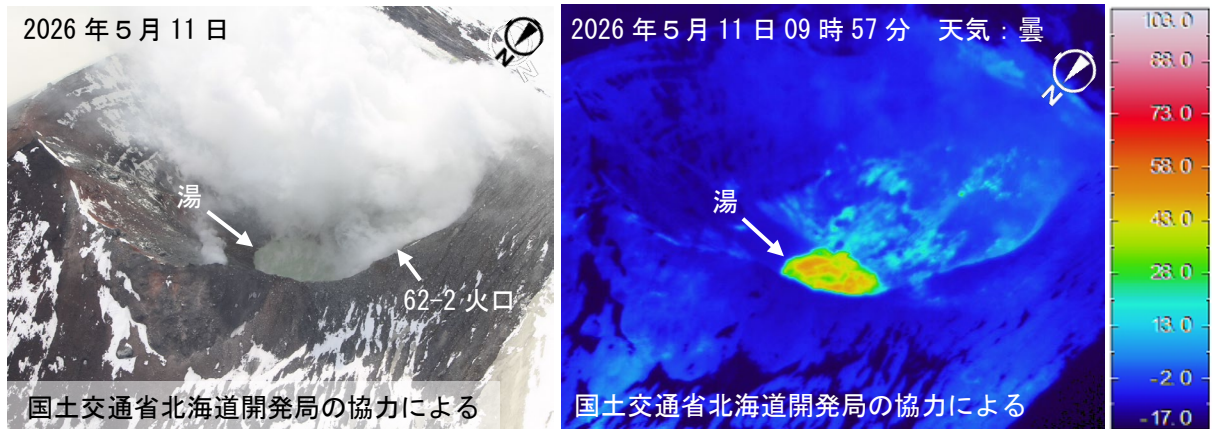


図7 十勝岳 赤外熱映像装置による62-2火口の地表面温度分布
 上：北西側上空（図5の②）から撮影 下：北東側上空（図5の③）から撮影
 ・62-2火口底には、湯がたまっていました。

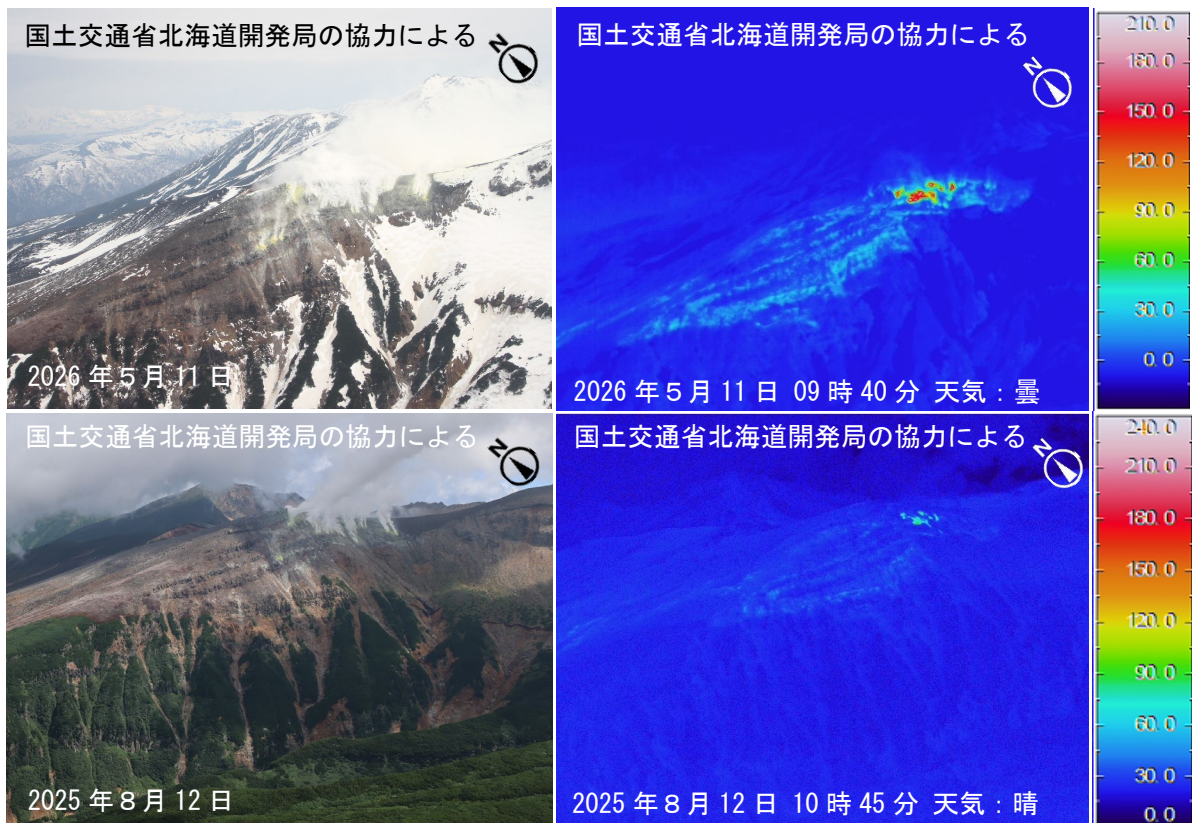


図8 十勝岳 赤外熱映像装置による振子沢噴気孔群の地表面温度分布
 上：南西側上空（図5の④）から撮影 下：南西側上空（図5の⑤）から撮影
 ・2025年8月12日の観測と比べて、活発な噴気域の拡大及び高温化が認められました。

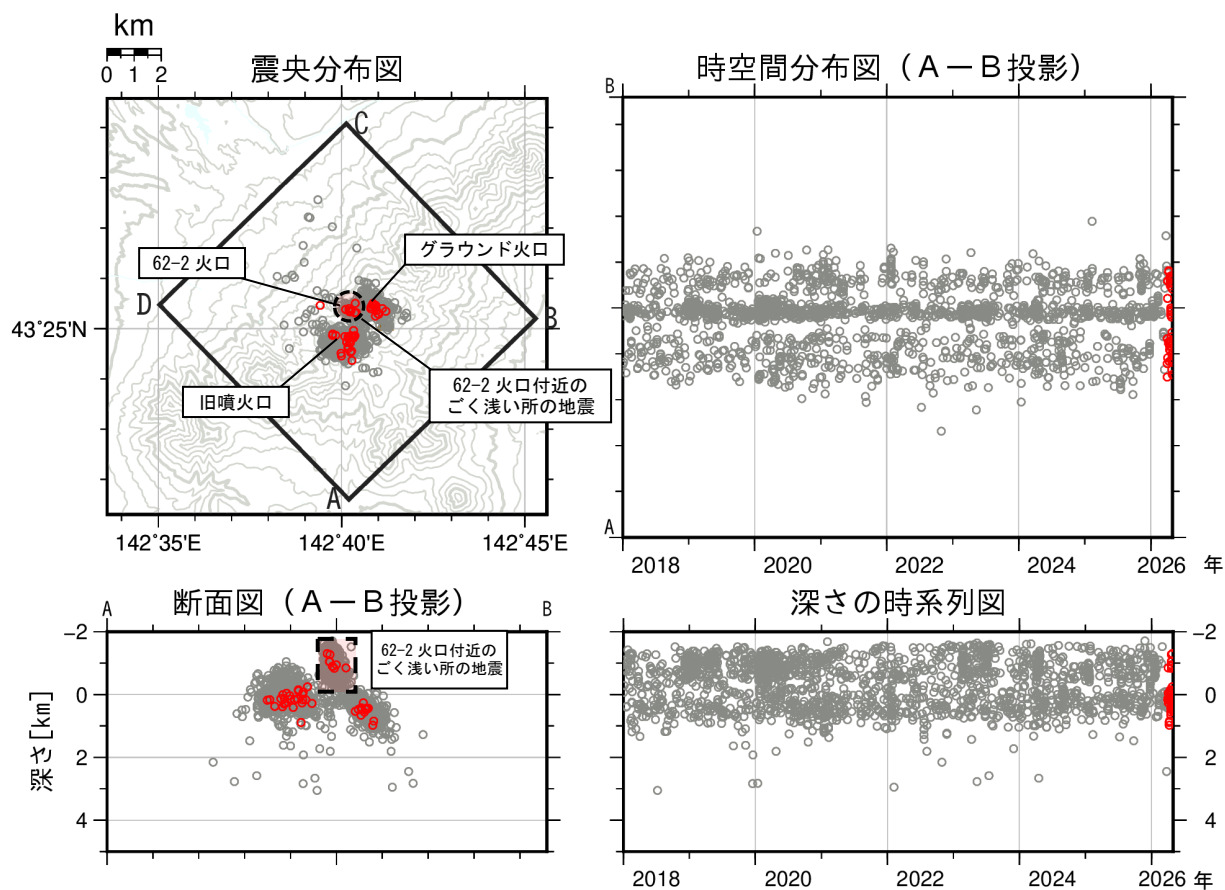


図9 十勝岳 火山性地震の震源分布（2018年1月～2026年4月）
 ○：2018年1月～2026年3月の震源 ○：2026年4月の震源

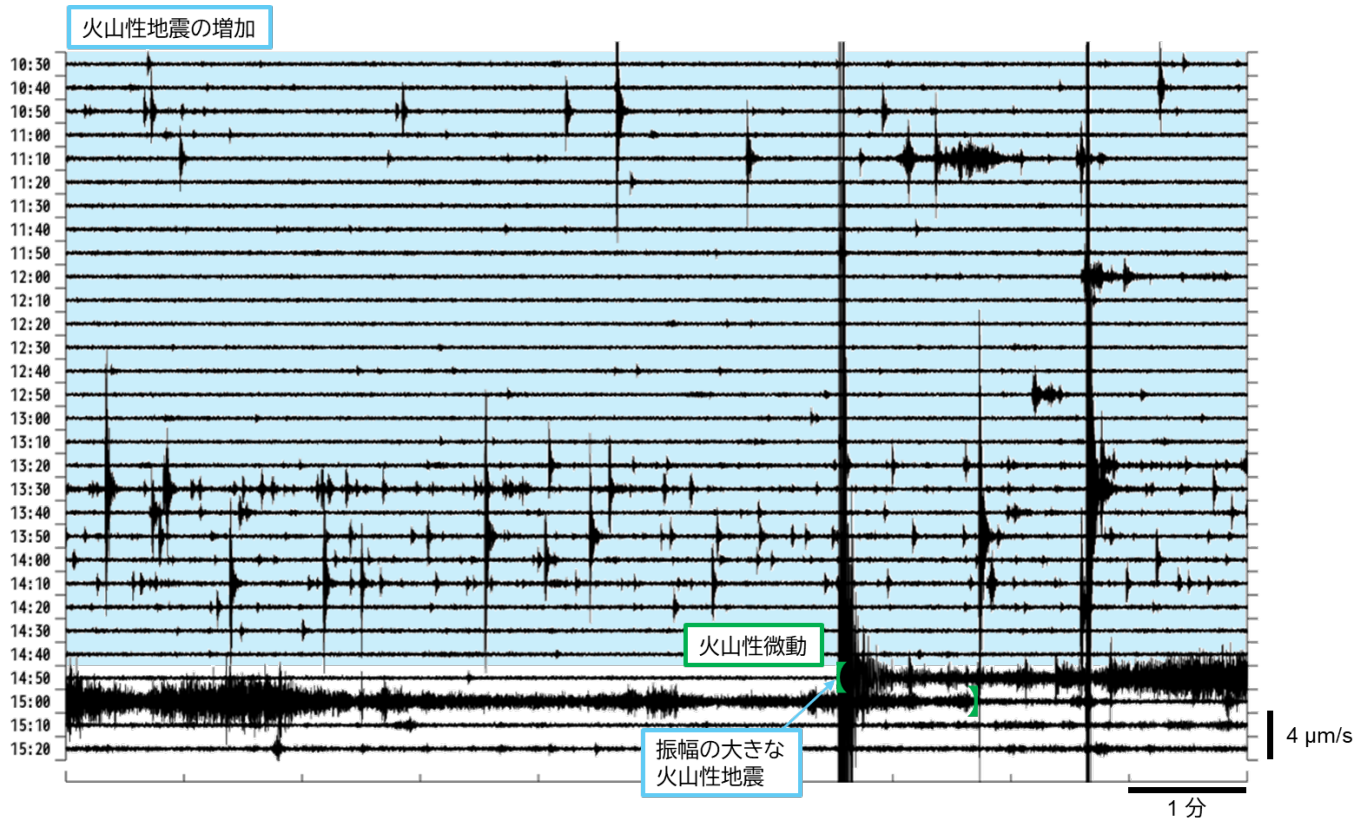


図10 十勝岳 避難小屋東観測点の上下速度波形 (4月20日10時30分~15時30分)

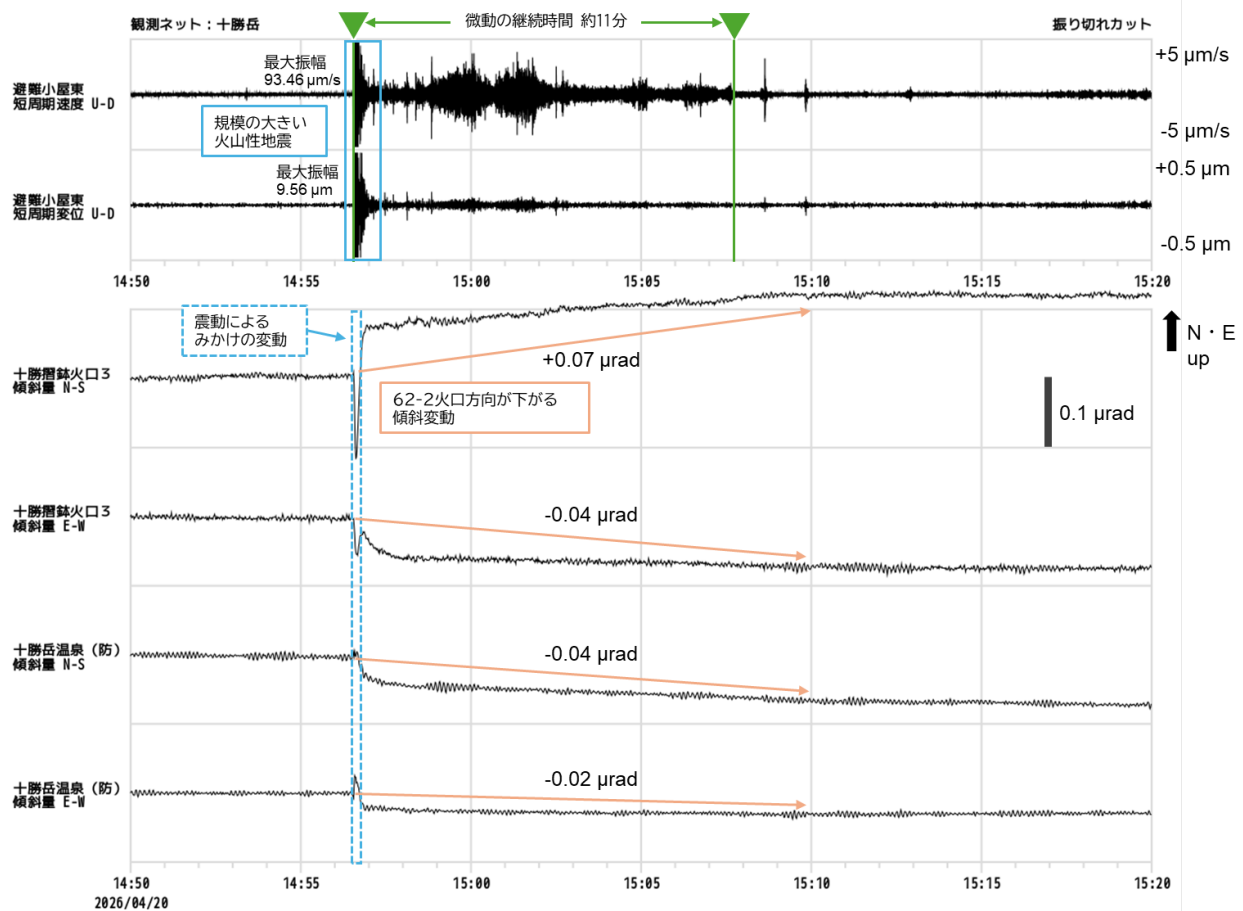


図11 十勝岳 14時56分頃に発生した火山性地震と火山性微動及び傾斜の状況 (4月20日14時50分~15時20分)

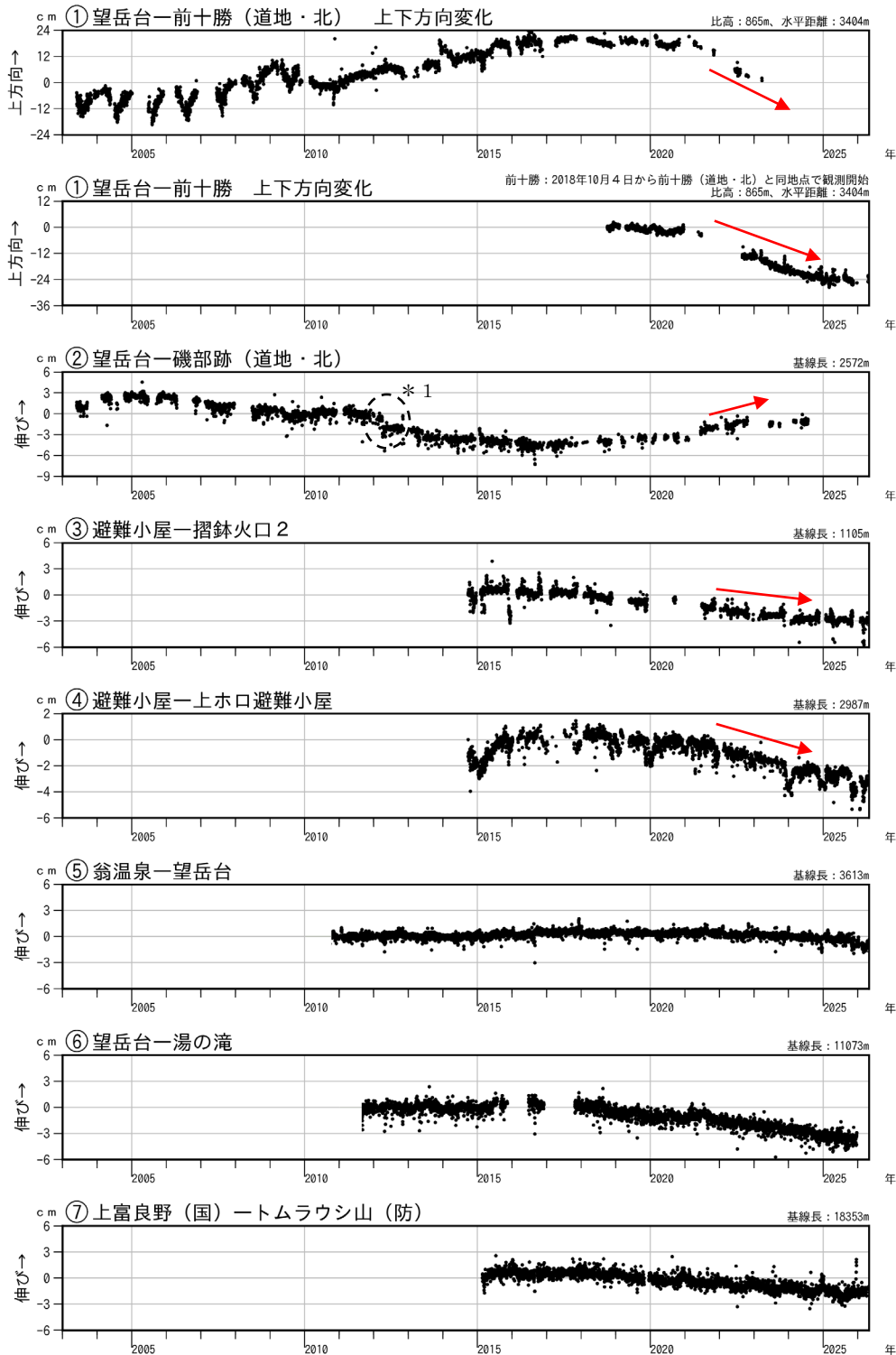


図12 十勝岳 GNSS連続観測による上下方向変化及び基線長変化 (2003年5月～2026年4月)

グラフ①～⑦は観測点配置図 (図13) の基線①～⑦に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示します。

冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。

2010年3月の前後で解析方法が異なります。

* 1: ステップ状の変化 (黒破線内) は機器変更によるものです。

- ・ 基線①～④では2021年頃から山体浅部の収縮を示すと考えられる基線長の変化及び沈降 (赤矢印) が観測されていましたが、2022年頃からやや鈍化し、2024年秋以降は概ね停滞しています。ただし、62-2火口のごく近傍の観測点を含む基線①では、観測点付近の局所的な変形の影響も受けていると考えられます。
- ・ 基線⑥⑦では、2018年以降ごくわずかな短縮傾向が続いています。

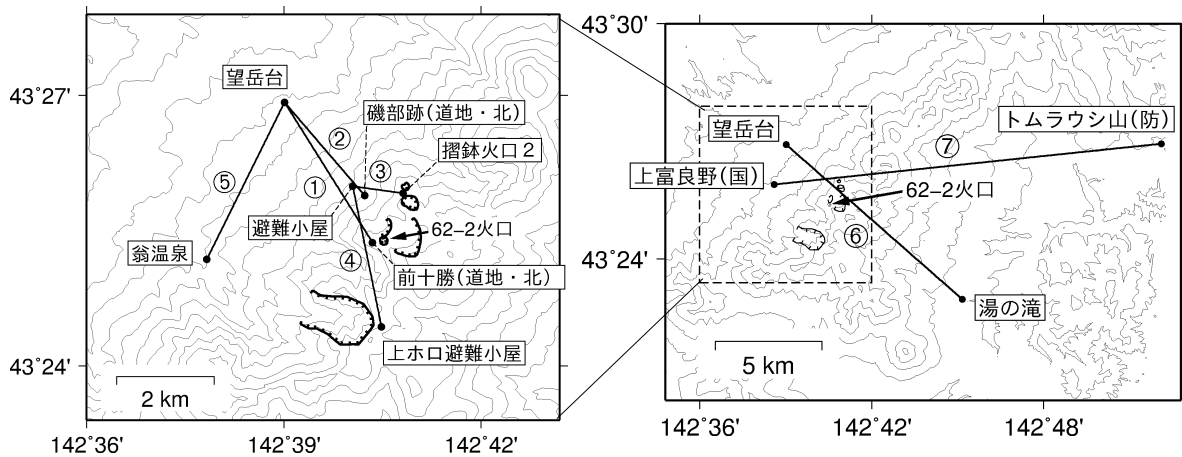
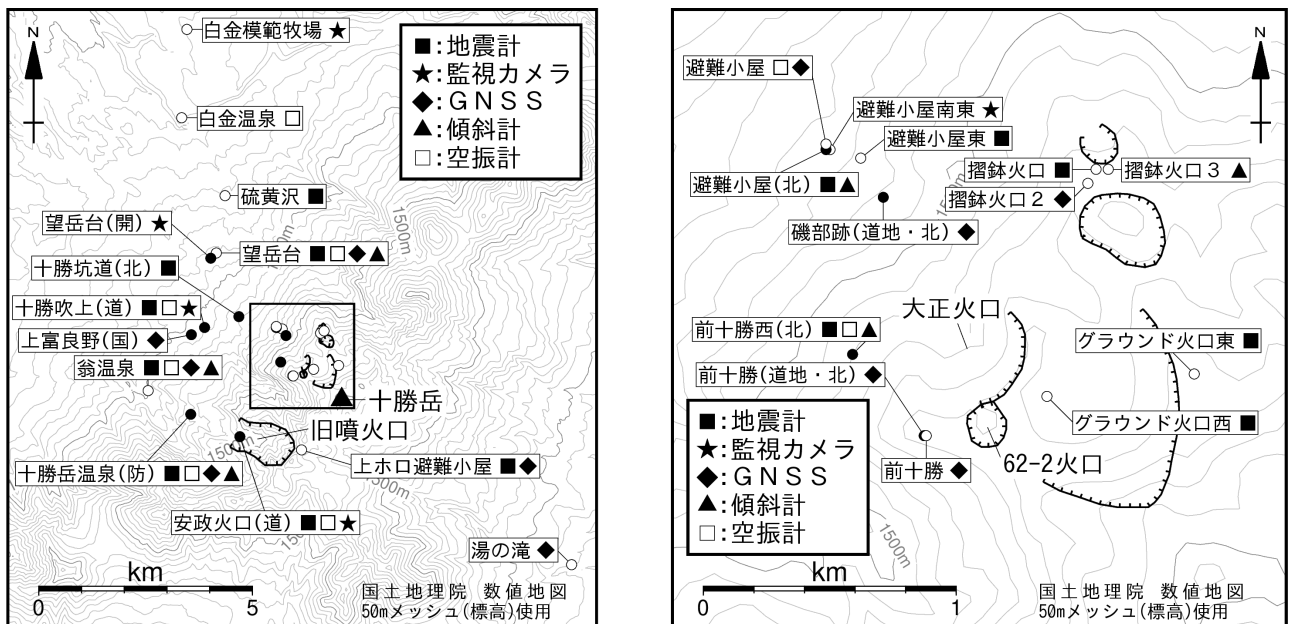


図13 十勝岳 GNSS連続観測 観測点配置図
 図中の基線①～⑦は図12のグラフ①～⑦に対応しています。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は他機関の観測点位置を示しています。
 (開):国土交通省北海道開発局、(国):国土地理院、(北):北海道大学、(防):国立研究開発法人防災科学技術研究所、(道):北海道、
 (道地):地方独立行政法人北海道立総合研究気候エネルギー・環境・地質研究所

図14 十勝岳 観測点配置図